HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	献辞
Author(s)	石垣, 博美
Citation	北海道大學　經濟學研究, 30(1), 1-3
Issue Date	1980-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31478
Type	bulletin (article)
File Information	30(1)_P1-3.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

献　　辞

大爺教授は，55年4月1日をもって定年をむかえ，退官される。教授は，生涯の大半を北海道大学とともに過ごし，この大学のためにつくされた。その長年の労にむくいるにはささやかにすぎるけれども，本論文集1巻を教授への退官記念として献げるものである。

教授は，昭和15年，北海道大学農学部農業経済学科を卒業後，同学部副手をへて，同19年助手に任ぜられ，22年農学部助教授に昇任された。29年，経済学部独立にあたって経済学部のスタッフへ配置換となり，36年教授に昇任し，今日に至っている。

経済学部において教授は，一貫して経済地理学を講じた。経営学科が設置されたことに伴い，経営立地論の講義も担当され，また経済学や経営学の原書講読も担当，学部学生および大学院学生の指導・教育に熱意をもってあたられ，数多くの優れた人材を世に送り出している。

教授の学問的関心は，ひとも知るように広く且つ深く，とうてい余人の追随を許さぬユニークなものである。日本における学派や学会から超然として，ひとり独自の学風を築きあげたというべきであろう。もともと教授の研究活動は，農業経済学科に勤務していた当時，上原轍三郎教授から植民学，渡辺侃教授から農業経営学の研究指導をうけたことに始まるが，当初から経済地理学的視点を強調する特異な分析方法を人知れず開発していた。その後アメリカのウイスコンシン大学に留学，多くの師や友人に恵まれた。とくにGlenn Trewartha 教授から地理学一般に関する本格的指導をうける機会を得た。これがもとになって，帰国後，経済学部に配置換になったのを機に，社会・経済地理学の研究に専念することになるが，ちょうどその頃，ドイツの社会・経済地理学会の権威 Peter Schöller 教授（ルール大学）の知遇をえる機会にも恵まれ，以来，親しく学問的交流をはかり，その影響をつよくうけながら今日に至っている。きわめて厳しい実証・経験主義への希求と超

俗のイマジネーションは，大爺教授の学風を貫く経緯の2糸のようにみうけられるが，これはおそらく上のおふたりの学者との交遊のうちに培われたものであろう。けっして多作とはいえないながら，教授の手になる珠玉の業績は，三つの分野にわかれている。アメリカにおける都市の分布，成長，機能に関する研究がその一つであり，西ヨーロッパ，とくにドイツの経済社会に関する経済地理学的研究が第2の分野をなす。なかでも，「ドイツ連邦共和国における人口の国内移動の研究」は，日本における先駆的な実証的業績として高い評価をうけ，これによって経済学博士の称号がさずけられた。第3は，日本とくに北海道の都市の相互依存および機能分化の研究にまたがるもので，北海道都市学会の運営に当たられながら研究が続けられ，おそらく今後もその続行が期待される分野である。

学内の行政面でもまた，教授の貢献は大きい。とくに，評議員・学部長としてたいへんむずかしい時期に，経済学部の運営と発展に献身的な努力をされた。なかでも，51年4月大学院経済学研究科経営学専攻（修士課程）の設置のさい，教官の充足などにつくされた功績は多大である。

教授は学外においても，北海道の経済学研究の中心的学会である北海道経済学会の幹事・理事として活躍された。また，北海道の都市問題にかんする行政的実務と研究面との接点としての役割をもつ北海道都市学会の運営にあたり，47年から3年間会長に選任されるなど，学会の発展に尽力されている。

教授の学風をそのお人柄ときり離して考えるのは，むずかしい。こよなく酒を愛し，そしてまたひとを愛する教授の風貌に接したほどのものは，同僚・学生をとわずみな，はかりしれないほどの感化や影響をうけている。鋭い観察を暖かいユーモアで包んだ独特の話術は，はたに座するものの心をなごませずにはおかない。われわれは，教授そのひとのたくまざる洒脱さと闊達さのまえに，思わず心をひらかせられるのである。しかしやがて，教授の頭のなかの，諸学万般にわたる厖大な知見の一大宝庫に圧倒されてしまう。そして欧米の理倫や思想を研究しているわれわれきまじめな経済学徒は，い

やおうなしに，学問の広さや深さ，研究のきりのなさを思い知らされるのである。

教授が北大の教壇を去られるのは，いかにもさびしい。それは一つの時代が過ぎてゆくかのようである。教授は若いころからよく歩いたので，これで身体が丈夫になったという。退官後は，悠々自適，世界を旅する機会も多くなるだろうときく。それならばこれからも，大学に足を向けられて，われわれ後進の蒙をひらいて下さるようお願いしよう。そしてギリシャやスペインの，夏草のしげる廃墟の美しさなど，またおきかせ下さい。

昭和55年3月

北海道大学経済学部長　石　垣　博　美